

吉蔵の仏身思想の研究

―殊に法身と応身の関係について―

藤野泰二

(仏教学専攻博士後期課程3年)

はじめに

本稿は、中国三論宗の大成者、嘉祥大師吉蔵(五四九―六三三)の仏身の理解について考察したものである。吉蔵の仏身の理解については、すでに丸山孝雄博士の「吉蔵の仏身観―法華遊意を中心として―」(一九七七年)、吉蔵の法華遊意における仏身観(一九七八年)、平井俊榮博士の「吉蔵の仏身論―三身説を中心に―」(一九七八年)、「東アジア仏教の仏陀観」(一九九五年)、末光愛正氏の「吉蔵の仏身論」(一九八六年)や、花野充道氏の「智顛と吉蔵の法華仏身論の対比」(二〇〇〇年)等に詳細に論じられている。ただ、それらの論文においては、まだ吉蔵の法身と応身との関係について正確に論及し尽くされておらず、¹⁾本稿では、先学の研究成果に基づきつつ、この点について考察を加えてみたい。

※ 藤本晃氏の指摘するように、三身説の呼称については、法身・報身・応身が一般的であるが、吉蔵は真諦訳『撰大乘論釈』の釈文中で使われている法身・応身・化身の語を基本的に三身の語として用いる。『撰大乘論』本文では、自性身(svābhāvika-kāya)・受用身(saṃhogika-

kāya)・變化身(nirmāṇika-kāya)の語を三身説の用語として使用し
しる。

一、仏身論の諸説

中国においては、仏身論は初め二身説(法身・色身)として展開したが、その後、三身説を述べた経・論が訳出されるに従い、三身説が主流となる。吉蔵に先行する人物の著作で、三身説が説かれているものとして、淨影寺慧遠(五二二―五九二)の『大乘義章』²⁾「三仏義」がある。吉蔵は『法華玄論』において仏身論について究明するにあたって、『金光明経』・『十地経論』によって三身説を構築していた慧遠の説を超越するため、慧遠が見ていなかった『撰大乘論』・『法華論』に基づきながら自己の仏身論を理論立てている。³⁾吉蔵の仏身論の特徴として挙げられるのは、吉蔵が経・論において説かれる仏身論をまとめあげようとする態度である。⁴⁾吉蔵は当時までに現れていたさまざまな仏身論の教説を収集し、それらを会通しようとして努力している。そのため、多くの経・論の引用をなし、

それぞれの仏身論を併記する。たとえば、仏身の名称については、經・論に名を列すること同じからず。或るは、法身・舍那身・釋迦身なり。又は、法身・報身・化身と名づく。又は、法身・應身・化身と名づく。又は、佛所見身・菩薩所見身・二乘凡夫所見身と名づく。

と述べた後、それぞれの典拠について、

初めは『梵網經』に出づ。次は『像法決疑』・『金剛波若論』に出づ。次は『攝大乘論』の説に出づ。次は『涅槃』・『日喻品』に出づ。三時の短・長の異なりは佛と菩薩と二乗の所見の同じからざるが如し。經説は名は異なるも意は猶お一なり。

と列挙し、『梵網經』の説は法身・舍那身・釈迦身、『像法決疑經』・『金剛般若經論』の説は法身・報身・化身、『攝大乘論』の説は法身・応身・化身、『涅槃經』の説は佛所見身・菩薩所見身・二乘凡夫所見身である、と述べている。

吉藏は当時までに知られていた諸經・論の仏身論（一身・三身・四身）について、それらを次のように四種類（合本合迹・開本開迹・開本合迹・開迹合本）にまとめている。

今、融會せんと欲せば、衆經及び論に或いは二身、或いは三身、或いは四身あり。今、總束して四句と爲す。

一には、合本合迹。『金光明』に但だ一本一迹のみを辨ずるが如くなり。故に云わく、「佛の眞の法身は猶お虚空の如し。物

に應じて形を現すは水中の月の如し」と。

二には、開本開迹。『五凡夫論』の如きは四佛有りと明かす。本を開いて二身と爲す。一には法身、二には報身なり。法身は即ち佛性なり。報身は修因の滿じて佛性を顯出するを謂う。迹を開いて二身と爲す。菩薩を化するを舍那と名づけ、二乗を化するを釋迦と名づくるなり。

三には、開本合迹。『地論』・『法華論』に明かす所の如し。本を開くとは、謂わく二身なり。佛性は是れ法身、佛性の顯わるるを報身と爲すを謂う。

四には、開迹合本。『攝大乘論』の明かす所の如し。佛性及び佛性の顯わるるを合して皆な法身と名づく。迹を開いて二と爲す。菩薩を化するを舍那と名づけ、二乗を化するを釋迦と名づく。此れ皆な經・論の義に隨いて之れを説く。悉く相違せず。衆師は其の意を體らざるが故に諍論を起すのみ。

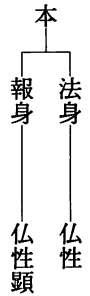
この記述をまとめると次のようになる。

①合本合迹 本—眞法身—如虚空

迹—応物現形—如水中月

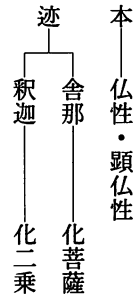


③開本合迹



迹 (化身)

④開迹合本



この『十地経論』・『法華論』・『撰大乘論』はすべて世親釈であるが、仏身論に違いが生じている理由として、

『地論』・『法華論』は是れ菩提留支の出だす所なり。『撰大乘』は是れ眞諦三蔵の翻ずる所なり。此の三部は皆な天親の述作する所にして、義を明かすに異なり有るは、或いは當譯人の其の意を體らざるなり。⁹⁾

と述べ、このような仏身論の違いは世親にあるのではなく、翻訳者の理解によって生じたものであるとする。ただ、吉蔵自身もその解釈が一定していなかった例として、他の箇所吉蔵の『撰大乘論』の仏身の説明を見てみると、

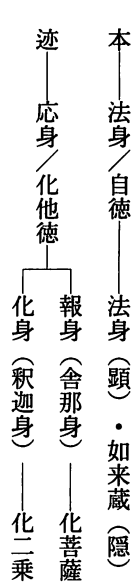
・『攝論』は法身を自徳と爲し、二身を化他の徳と爲す。¹⁰⁾

・『攝大乘論』に明かす所の若きは、隱を如來藏と名づけ、顯を名づけて法身と爲すのみ。此の二を皆な法身と名づく。應身の中に就いて自ら開いて二と爲す。菩薩を化するを報身と名づく。二乗を化するを化身と名づく。¹¹⁾

・『撰大乘論』に約して三身の義を明かすに、員に多小を得ず。

法身を自徳と爲し、餘の二身は化他の徳なり。化他の中に自ら二有り。一には、菩薩を化する身を總じて舍那身と名づく。二には、二乗を化する身を釋迦身と名づく。化する所は多しと雖も大・小を出でざるなり。¹²⁾

とある。これらの論述をまとめると以下のようなになる。



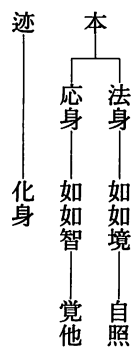
そして、これとは異なる『撰大乘論』の三身説が『法華統略』に説かれている。

論の開本合迹とは、如如境を以て法身と爲し、如如智を應身と爲す。故に開本なり。合迹とは、應身已外は皆な化身と名づく。¹³⁾

また、「如如境」・「如如智」の説明がこの箇所の直前にある。

如如智は即ち衆生を利益す。名づけて佛眼と爲す。是れ覺他の義なり。如如境は是れ自利なり。即ち如如智の所照の境なり。智は此の境を照らす。謂わく、自照の義なり。¹⁴⁾

これをまとめると以下のようなになる。



ここでは本身に法身・応身があてられ、迹身に化身があてられている。これは仏身の四種の区別によると、開本合迹にあたる。これは吉蔵の応身の理解に二種類あるというよりかは、吉蔵にとって法身とはどちらにも解釈しうるものなのである。そのことは、たとえば、

若し爾らば、法身を自徳と爲し、化身を化他の徳と爲し、應身は亦自亦化他なり。故に三身を立つるも亦た可なり。法身を體と爲し、報身を相と爲し、化身を用と爲す。體・相・用なるが故に三身を立つるなり。¹⁵

とあるように、自徳と化他の両方のはたらきを持つものとして認識されていたということである。

二、法身・応身について

これをより明確にしたのが、吉蔵の仏身の理解で特徴的とされる内応身・外応身という説である。この説の説明を見ると、

・報身は即ち是れ應身なり。應身に二有り。一には内應、謂わく、法身と相應す。是の故に經に云わく、「諸佛の師とする所は、所謂る法なり」と。法の常なるを以ての故に諸佛も亦た常なり。

二には外應、謂わく、大機の性と相應するが故に、大菩薩の爲めに淨土の中に於いて成佛す。内應は即ち實にして權に非ず、外應は謂わく權にして實に非ず。故に亦權亦實と云う。¹⁷

・『攝論』に「地前は化佛を見、登地は應身を見る」と云うは、此の應身は是れ眞如と相應するを名づけて應身と爲す。應身に二有り。一には内應、眞如と相應して、眞如の土に住す。二には外應、淨土に住し奇特の相好もて菩薩を教うるなり。¹⁸

・今、『攝論』に「初地は應身を見る」と云うは、此れは初地已上は眞如を見ると明かすが故なり。應身は眞如と相應すとは、即ち是れ内應身なり。本有の義を取りて、法身と名づく。如と相應するは始有の義なれば、應身と名づく。初地已上は此の應身を見るなり。今、分身を應身と爲すと言うは、此れは是れ外應身なり。位は上下に通ず。¹⁹

つまり、吉蔵は応身を内応身と外応身との二種に分ける。内応身とは仏性が顕われたものであり、法身と相應したもの、つまり修行の結果得られた仏身であり、最初の引用で吉蔵が「報身は即ち是れ應身なり」と述べているのは、この内応身が報身としての意味を持つということなのである。また、外応身とは菩薩を教化する（覺りを得させる）ものである。このように考えることによって、内応身には自利としての報身の意味を持たせ、また、利他としての応身の意味は外応身に持たせることによって、自利・利他の二義を応身に

において統合させたのである。²⁰ また、内応身のことを本有の意味によつて法身というところがある。

しかし、内応身はあくまでも修行の結果として得られる仏身のことである。このことは、たとえば、吉蔵の『法華義疏』の『法華経』譬喩品における「舍利弗が華光如来となるであろう」との授記を受ける箇所への注釈部分での問答で、

問う、諸經の授記は、何故に但だ應身の記のみを授けて、法身の記を授けざるや。

答う、應身の記を授くるは、即ち是れ法身の記を授くるなり。修因既に満ちて便ち法身を證す。方に能く本を以て迹を垂れ、淨穢の國土に託して佛と成りて人を化す。但だ法身は猶お虚空の如く、所として在らざる無し。物を引くに便ならざるが故に、法身の記を授けず。²¹

と答えているように、法身と相応している応身（内応身）のことであつて、虚空の如くと言われる法身とはまったく異なるものなのである。

ここで吉蔵の法身の説明について見てみると、平井博士は次の一文を吉蔵の代表的な法身の定義としている。²²

今、此の中の法身を明かすとは、即ち是れ實相眞如の法なり。此の實相の正法の隠れたるを如來藏と名づけ、此の實相の法の顯わるるが故に法身と名づく。唯だ是れ一實相の法なり。隱・

顯に約して同じからず。故に藏と身と有り。又、法とは、謂わく、諸の功德なり。法の所依を身と名づく。故に『攝論』に云わく、「功德法と相應するを法身と名づく」と。²³

ここでは法身とは実相の法のことであると述べている。吉蔵が法身と実相を同義として扱っていることは、『中觀論疏』において「法身を性空と言うのはなぜか」との問いに、

『大品』に云わく、「性空を諸佛の道と名づく」と。故に知る、是れ法身の異名なり、と。亦た、寂滅、實相及び法身と名づくるなり。²⁴

と答え、性空の異名として、寂滅、実相、法身を挙げている他、横に百非を絶し、豎に四句を起こすを、名づけて諸法實相と爲す。(略)。衆生は横に百非を起こし、豎に四見を生ずるを以て、實相を隱覆するが故に名づけて佛性と爲す。若し百非は本とより空にして、四句は常に寂なるを知れば、即ち佛性は顯わるるを稱して法身と爲す。『楞伽經』には法身の五の名を出だす。

謂わく、眞如・法性・實際・法界・法身なり。²⁵ 今の論にも五の名を出だせり。初めには實相と名づく。次には如・法性・實際・涅槃なり。²⁶

とも述べ、『入楞伽經』に説かれる異名として、眞如、法性、實際、法界を、『中論』からは、実相、如、法性、實際、涅槃を挙げており、また、

今、此の身を觀察するに、本とより來、寂滅にして即ち是れ實相なり。既に是れ實相なれば、便ち是れ法身なり。故に『淨名經』に云わく、「身の實相を觀するに、佛を觀するも亦た然なり」と。蓋し是れ一論の通意なり²⁷と述べていることから明らかである²⁸。

三、実相について

では、吉蔵にとって実相とはどのようなものであったかというところ、『中觀論疏』に次のように述べられている²⁹。

今、只だ色は是れ實相なりと論ず。假名の色の如きは有なるべからず、無なるべからず。四句に色を求むるも不可得なり。故に色は即ち是れ實相なり。(略)。又、天主は須菩提の所説を歎ず、「假名を壊せずして實相を説く」と。故に知る、假名は宛然にして即ち是れ實相なり、と³⁰。

吉蔵にとつての実相とは「假名宛然即是実相」という言葉に表されるように、假名に即したものであって、假名を超越した何物かではないのである。

このような超越的なものを認めない吉蔵の思想の根本にあるのは三論教学で〈初章〉³¹と呼ばれる次のような思想である。『中觀論疏』には〈初章〉について、

須らく初章の語にて之れを簡ぶべし。(略)。今、有の有なるべ

き無ければ、即ち無の無なるべき無し。有の有なるべき無ければ、無に由るが故に有なり。無の無なるべき無ければ、有に由るが故に無なり。無に由るが故に有なれば、有は自ら有ならず。有に由るが故に無なれば、無は自ら無ならず。有は自ら有ならざるが故に有に非ず。無は自ら無ならざるが故に無に非ず。有に非ず無に非ざれども、假りに有無と説く³²。

と述べている。これは羅什の弟子であった曇影が書いた『中論序』に基づいたもので、中国三論宗においては初めに学ぶべき根本的な考え方(初學之章門)と言われる。有・無というのは、それぞれがそれぞれに依りて生じているのであって、固定的に捉えることはできず、それらを成立させる究極的なものもまた存在しない、とするものである。

よって、吉蔵においては、法身・応身、本身・迹身といつても、一方が他方を生じさせる根源的なものであると考えることはない。

このことについて吉蔵は、

・『楞伽經』の「法身品」に有り、「旨を發するに即ち如來の法身と五陰とは一・異を論ずべからず」と明かす。今の偈は二義を具すべし。一には五求して邪佛を破す。二には如來の法身は此の五句に非すと明かす。即ち正佛を申ふるなり。若し佛法の義を破せば、若し佛と陰と一ならば、本・迹は應に一なるべし。迹を見、應に本を見るべし。亦た本・迹は應に俱に常、俱に無

常なるべし。若し常・無常有らば是れ則ち一ならず。若し陰を離れて佛有らば、人・法は則ち並びに便ち相い成せず。本・迹も亦た爾り⁽³³⁾。

・又、一義とは肇公の云うが如し、「本迹殊なりと雖も不思議一なり」と。故に一義なり。又、一義とは、寂に即して動なるが故に、眞は即ち是れ應なり。動に即して寂なるが故に、應は即ち是れ眞なり。故に肇師の云わく、「豈に近く丈六を捨てて、遠く法身を求むる者ならんや」と。無義と言うは、寂に即して動なれば、眞と雖も應なり。動に即して寂なれば、應と雖も眞なり。眞と雖も應なるが故に、眞は定んで眞に非ず。應と雖も眞なるが故に、應は定んで應に非ず。眞に非ず應に非ず、慮絶し言亡ずるを稱して無義と爲す。眞應に非ずと雖も、眞應は宛然なり。故に是れ無義にして有義なり。故に有義と稱するなり⁽³⁴⁾。

と述べている。また、『注維摩詰経』の僧肇の序文にある「本・迹は異なるとはいえども不思議にして一なるものである」という言葉⁽³⁵⁾を引用し、迹身を離れて別に本身といったものがあるわけではないのだという。

吉蔵においては法身と衆生とは異なるものではない。法身のはたらきそのものとして衆生はあるのであるが、衆生はそのことを悟れず、我執を起し、法身とわが身とが分断してあるものと思ひ込ん

でしまっているのである。よって、吉蔵は僧肇の言葉を引用しながら、次のように述べる。

・衆生は法身は百非を超え四句を絶し身の外に在りと謂いて、則ち衆生と法身との高下の二見を起し、又、物に於いて無益なるを恐る。故に今、三界は即ち是れ十不なりと明かす。肇公の云わく、「道遠からんや。事に觸れて眞なり。聖遠からんや。之れを體れば則ち神なり」と⁽³⁶⁾。

・因縁は即ち寂滅性なり。寂滅性は則ち四句を施し百非を超ゆる。故に「如來品」には寂滅を以て法身と爲すという。又、只だ丈六は即ち是れ法身なり。故に高さ丈六なるも其の頂を見ず。下豈に定んで下ならんや。若し其の高さを言わば那ぞ復た丈六ならんや。故に知る、高ならず下ならず、邊・無邊に非ず、と。故に肇師の云わく、「豈に丈六を捨てて遠く法身を求むるや」と。『涅槃』に云わく、「吾が今此の身は即ち是れ法身なり」と⁽³⁷⁾。

ここでは法身と衆生とは隔絶されたものではないと述べられている。衆生は有所得である限り、外に法身を求めたり、この身の他に法身なるものがあると思ひ込んでいるのである。これは、

其れ五陰は本とより來、寂滅なりと了するを名づけて佛性と爲す。別に佛性有りて陰身に住在せず⁽³⁸⁾。

と仏性に関して述べているように、わが身とは別に仏性というもの

が存在しているということではないのである。また、『勝鬘宝窟』には、

衆生の身は即ち法身なるが故に甚深なり。『中論』に「如來の身は四句を絶す。衆生の身も亦た四句を絶す」というが如し。

『維摩』に云わく、「身の實相を觀ず、佛を觀するも亦た然なり」と。是の故に衆生の身は即ち法身なり。故に甚深なり³⁹⁾

とあり、衆生と法身とは異なりがないことが説かれている。また、『法華義疏』には、

・六根は即ち是れ實相、實相は即ち是れ法身なりと悟るが故に六根無礙なり。⁴⁰⁾

・此の六根は幻の如く夢の如く因縁従り生ず。因縁生は即ち是れ寂滅相なり。寂滅相は即ち是れ實相なり。實相は即ち是れ法身なりと達すべし。⁴¹⁾

とあり、因縁生によって生じているものは、寂滅であって、実相に他ならず、それが同時に法身であることが述べられている。

小 結

以上の考察をまとめると、吉蔵は仏身を理解するにあたって仏身論を述べている諸種の経・論にあたりながらも、その記述通りに受け容れたのではなく、自己の依憑する三論教学に基づく形で、それらの仏身論を取り入れ、自己の仏身論を構築した。吉蔵の二諦説に

において説かれる、仮名の中に実相を觀ずる、という思想を基礎とした吉蔵の仏身論は、法身を超越的な存在として立てることはない。

また、応身に自徳・化他徳の二義があることを明確にするため、応身を内応身・外応身の二種に分類し、内応身は自徳、外応身は化他徳を持つものとした。吉蔵の仏身論においては、法身は応身と離れてあるものではなく、応身が現れるというはたらきがそのまま法身としてあるということなのである。

注

(1) たとえば、菅野博士は、吉蔵の『法華遊意』の詳細な訳注研究（現代語訳、訓読、注、解説から成る）である『法華とは何か―法華遊意』を読む（一九九二年）を出版されているが、その中で次のように述べている（菅野『99』:110）。（傍線は筆者によるもの）

釈尊は娑婆世界という穢土に住み、分身仏は浄土に住んでいるが、いずれも衆生を救済するために具体的な姿を現わした仏（応身、迹身）である。これに対して、釈尊や分身仏のよって来たる、浄土や穢土を越えた仏が法身である。そして、応身が静寂であり、根源的存在である法身が唯一であることは理解しやすい。

ただし、法身の不二と応身の不一に執られれば、法身と応身をまったく異なる二つの存在と見る誤った見解に陥ってしまう。これが二見と言われ、有所得の心と批判されている。法身は不動でありながら、十方世界に応身の姿を現わす。応身の姿をいくら現わしても、それによって法身が影響を受けることなく常に静寂であり、けっして法身が無くなってしまうことなど

ないのである。応身が現われても、常に静寂な法身を離れない点においては、応身が法身であり、常に静寂でありながら、惜しみなく応身の姿を現わす点においては、法身が応身である。このように両者の関係は、不二にして二、二にして不二なのである。

菅野博士はここで法身を「根源的存在」とし、そこから応身が現れ出てくると捉えている。ただ、法身は応身を現出させるものであるから、法身と応身は不二、と述べているのであるが、そのように考えてよいのであろうか。吉蔵の二諦の理解に依るのなら、吉蔵は存在を超越した何物かを決して考えることはない。それは仏身論に關しても徹底されているはずである。

(2) 藤本 [1988: 87] には、「吉蔵の見た『撰大乘論』は法、応、化身を示す一方、主として自性、受用、變化身を用いる。これを釈した『撰大乘論釈』は、自性、受用、變化身を殆ど法、応、化身に換えている。吉蔵は『撰論』を世親造とし、また自性、受用、變化の三身を考察してないので、釈本を取り上げたと思われる」とある。

なお、三身の梵語については、長尾博士の蔵訳からの還梵を参照した (cf. 長尾 [1987: 315])。

(3) cf. 平井 [1978: 10-11]

(4) 花野 [2000: 109] には「吉蔵は智顛に比べてより学者的であるから、各種経論に説かれる仏身論の不同を総合的に把握しようとして、さまざまな角度から会通を加えている」とある。

(5) 『法華玄論』卷第九「經論列名不同。或法身舍那身釋迦身。又名法身報身化身。又名法身應身化身。又名佛所見身菩薩所見身一乘凡夫所見身。」(T34.437c)

(6) 『法華玄論』卷第九「初出梵網經。次出像法決疑金剛波若論。次出攝大乘論說。次出涅槃日喻品。三時短長之異如佛菩薩二乘所見不同。經說異名意猶一也。」(T34.437c)

(7) 『法華玄論』卷第九「今欲融會者。衆經及論或二身或三身或四身。今總束爲四句。一合本合迹。如金光明但辨一本一迹也。故云佛眞法身猶如虛空。應物現形如水中月。二開本開迹。如五凡夫論明有四佛。

開本爲二身。一法身二報身。法身即佛性。報身謂修因滿顯出佛性。開迹爲二身。化菩薩名舍那。化二乘名釋迦也。三開本合迹。如地論法華論所明。開本謂二身。謂佛性是法身。佛性顯爲報身。四開迹合本。如攝大乘論所明。合佛性及佛性顯皆名法身。開迹爲二。化菩薩名舍那。化二乘名釋迦。此皆經論隨義說之。悉不相違。衆師不體其意故起諍論耳。」(T34.437d)。『大乘玄論』卷第三 (T45.45c) にも同文がある。

(8) この図については、平井 [1978: 8]・[1995: 90] および末光 [1986: 36] を参照した。

(9) 『法華玄論』卷第九「地論法華論是菩提留支所出。攝大乘是眞諦三藏所翻。此三部皆天親之所述作。而明義有異者。或當譯人不體其意。」(T34.437a-b)。『大乘玄論』卷三 (T45.45c) にも同文がある。

(10) 『大乘玄論』卷第三「攝論法身爲自德。一身爲化他德。」(T45.46a)

(11) 『法華玄論』卷第九「若攝大乘論所明。隱名如來藏。顯名爲法身耳。此二皆名法身。就應身中自開爲二。化菩薩名報身。化二乘名化身。」(T34.437a)。『大乘玄論』卷三 (T45.45c) にも同文がある。

(12) 『法華玄論』卷第九「約攝大乘論明三身義。具不得多小。法身爲自德餘二身化他德。化他中自有二。一者化菩薩身總名舍那身。二者化二乘身名釋迦身。所化雖多不出大小也。」(T34.437c)

(13) 『法華統略』卷上末「論開本合迹者。以如如境爲法身。如如智爲應身。故開本也。合迹者。應身已外。皆名化身。」(Z27.472a; 菅野 [1998: 396-397])

(14) 『法華統略』卷上末「如如智即利益衆生。名爲佛眼。是覺他義。如如境是自利。即如如智所照之境。智照此境。謂自照義。」(Z27.472a; 菅野 [1998: 396])

(15) 『大乘玄論』卷第三「若爾法身爲自德。化身爲化他德。應身亦自亦化他。故立三身。亦可。法身爲體。報身爲相。化身爲用。體相用故立三身也。」(T45.46a)

(16) 丸山 [1978: 80] には「吉蔵の念頭には常に「舍那」があり、「報身即是応身」として応身を「内応法身」と「外応大機」に開いたところ」にその特色がある」とある。

- (17) 『法華義疏』卷第十「報身即是應身。應身有二。一者內應謂與法身相應。是故經云。諸佛所師所謂法也。以法常故諸佛亦常。二者外應謂與大機性相應故爲大菩薩於淨土中成佛。內應即實非權。外應謂權而非實。故云亦權亦實。」(T34,603b)
- (18) 『勝鬘寶窟』卷上之本「攝論云。地前見化佛。登地見應身者。此應身是與眞如相應。名爲應身。應身有二。一內應。與眞如相應。住眞如土。二外應。住淨土。奇特相好教菩薩也。」(T37,86)
- (19) 『法華統略』卷下本「今攝論云。初地見應身者。此明初地已上見眞如故。應身與眞如相應者。即是內應身。取本有義。名法身。與如相應。始有之義。名應身。初地已上。見此應身也。今言分身爲應身者。此是外應身。位通上下。」(Z27,510b; 菅野 [2000: 765])
- (20) 藤本 [1988: 86] には「慧遠の仏身論は眞・応二身を基盤に、二種の三身論を釈すが、その第二身の釈に於いては自利の報身と利他の応身が統合されずに並記されたままとなっている」とある。
- (21) 『法華義疏』卷第五「問諸經授記何故但授應身記不授法身記。答授應身記即是授法身記。修因既滿便證法身。方能以本垂迹。託淨穢國土成佛化人。但法身猶如虛空無所不在。引物不便故不授法身記。」(T34,517b)
- (22) 平井 [1978: 12-13] には「諸の恒沙の功德の法の所依止であり、実相の正法を身とするが故に法身という、というのが、吉蔵の代表的な「法身」の定義であるように思われる」とある。
- (23) 『勝鬘寶窟』卷下之本「今此中明法身者。即是實相眞如法也。此實相正法隱名如來藏。此實相法顯。故名法身。唯是一實相法。約隱顯不同。故有藏之與身。又法者。謂諸功德。法之所依。名身。故攝論云。與功德法相應名法身。」(T37,86c)
- (24) 『中觀論疏』卷第九末「大品云。性空名諸佛道。故知。是法身異名。亦名寂滅實相及以法身也。」(T42,143c)
- (25) ここで吉蔵は法身の異名の一つとして「法身」を挙げているが、『入楞伽經』卷第六「法身品第七」の如來の異名を数多く列挙している箇所を見ると、そこには「有知眞如者。有知實際者。有知涅槃者。有知法界者。有知法性者。」(T16,551a) とあるのど、「法身」とある

- のは「涅槃」の誤記であるかと思われる。
- (26) 『中觀論疏』卷第十末「横絶百非豎起四句。名爲諸法實相。(略)。以衆生横起百非豎生四見。隱覆實相故名爲佛性。若知百非本空四句常寂。即佛性顯稱爲法身。楞伽經出法身五名。謂眞如法性實際法界法身。今論出五名。初名實相。次如法性實際涅槃。」(T42,160a)
- (27) 『中觀論疏』卷第四末「今觀察此身本來寂滅即是實相。既是實相便是法身。故淨名經云。觀身實相觀佛亦然。蓋是一論之通意也。」(T42,62a)
- (28) 木村宣彰氏は「五種法身説—中国仏教初期における法身説の一類型—」(一九八八年)において、羅什の高弟であった僧叡の五種法身説について、僧叡の『維摩經義疏』の逸文によって考察している。僧叡の五種法身説とは、まだ三身説が伝わる以前でありながら、法身を五種に分類したもので、法性生身・功德法身・變化法身・虚空法身・実相法身に分けられる。実相法身について木村氏は「先の法性生身は妙行によって法性より生ずるものと為すのであるから、そこには当然「法性」とともに「如」や「實際」を以て仏(法身)と為す考えの存する可能性を含むものである。大乘經典には「如」「法性」「實際」はともに「諸法実相」と同義であると説く。この三者が同義である以上は「法性」と同様に「実相」を以て法身と為すことは言わば当然の結論とも言ひ得る」と述べている。(cf. 木村 [1988: 21])。木村氏は澄観の『大方廣仏華嚴經隨疏演義鈔』(T36, No. 1736) から引用しているのだが、この五種法身説と類似した説が吉蔵の『法華玄論』にもあることを指摘している。(cf. 木村 [1988: 16])。そこで吉蔵が挙げている五種の法身は、法性生身・功德法身・感応法身・虚空法身・実相法身 (T34,439b) で、「變化法身」が「感応法身」となっている他は同じ語である。この僧叡の五種法身説について木村氏は「僧叡の法身説は五種の法身を立てながらも実は仏身の一元論とも称すべきものであり、「この僧叡の法身説の立場は、ともすれば法身をもつてただ単に「理」のみの無人格・無活動なものとしてみがちな偏狭な見解に対して一石を投ずるものである。(略)。このように僧叡の法身説は、決して無活動で無形態な者ではなくて万

- 化に感応しつつ常に「仏事」を為している仏として把握されているのである」と述べている (cf. 木村 [1988: 25-26])。
- (29) 吉蔵の実相の理解についてはすでに平井俊榮博士の論考 (cf. 平井 [1975]) がある。そこで平井博士は「色が即ち是れ実相である」とまで極限しているのである。色が実相であるとは、有自性の色を以て真実となす法有の立場と同一視さるべきではない。(略)。この宛然として存する仮名の有に、法の真実の相があるというのである。(略)。この「仮名宛然として即ち是れ実相なり」という一句に、吉蔵の諸法実相観がよく示されているといえよう」と述べている (cf. 平井 [1975: 341])。
- (30) 『中観論疏』卷第八末「今只論色は實相。如假名色不可有不可無。四句求色不可得。故色即是實相也。(略)。又天主歎須菩提所說。不壞假名而說實相。故知假名宛然而即是實相也。」(T42.126c)
- (31) 〈初章〉については、平井 [1976] および伊藤 [1974] を参照。
- (32) 『中観論疏』卷第二末「須初章語簡之。(略)。今無有可有即無無可無。無有可有由無故有。無無可無由有故無。由無故有有不自有。由有故無無不自無。有不自有故非有。無不自無故非無。非有非無假說有無。」(T42.27c-28a)
- (33) 『中観論疏』卷第九末「楞伽經有法身品。發旨即明如來法身與五陰不可論一異。今偈可具二義。一者五求破邪佛。二明如來法身非此五句。即申正佛也。若破佛法義者。若佛與陰一本迹應一。見迹應見本。亦本迹應俱常俱無常。若有常無常是則不一。若雖陰有佛人法則並便不相成。本迹亦爾。」(T42.141b)
- (34) 『勝鬘寶窟』卷上之末「又一義者。如肇公云。本迹雖殊。不思議一。故一義也。又一義者。即寂而動。故真即是應。即動而寂。故應即是真。故肇師云。豈近捨丈六。遠求法身者哉。言無義者。即寂而動。雖真而應。即動而寂。雖應而真。雖真而應。故真非定真。雖應而真。故應非定應。非真非應。慮絕言亡。稱為無義。雖非真應。而真應宛然。故は無義而有義。故稱有義也。」(T37.15b)
- (35) 『注維摩詰經』卷第一「本迹雖殊而不思議一也。」(T38.327b) また、僧肇の「本迹殊なりと雖も不思議一なり」の一文は智顛も

- 好んで用いる (cf. 花野 [2000: 114])。
- (36) 『法華統略』卷下末「恐衆生謂法身超百非絕四句。在於身外。則起眾生法身高二見。又於物無益。故今明三界即是十不也。肇公云。道遠乎哉。觸事而真。聖遠乎哉。體之則神。」(Z37.472a; 菅野 [1998: 336])
- (37) 『中観論疏』卷第十本「因緣即寂滅性。寂滅性則施四句超百非。故如來品以寂滅爲法身。又只丈六即是法身。故高丈六而不見其頂。下豈定下耶。若言其高那復丈六。故知。不高不下非邊無邊。故肇師云。豈捨丈六而遠求法身。涅槃云。吾今此身即是法身也。」(T42.154b)
- (38) 『中観論疏』卷第四末「了其五陰本來寂滅名爲佛性。不別有佛性住在陰身。」(T42.66c)
- (39) 『勝鬘寶窟』卷下之本「衆生身即法身。故甚深。如中論。如來身絕四句。衆生身亦絕四句。維摩云。觀身實相。觀佛亦然。是故衆生身即法身。故甚深。」(T37.67c)
- (40) 『法華義疏』卷第十一「悟六根即是實相。實相即是法身故六根無礙。」(T34.615a)
- (41) 『法華義疏』卷第十二「達此六根如幻如夢從因緣生。因緣生即是寂滅相。寂滅相即是實相。實相即是法身。」(T34.632c)

略号・参考文献

- T = 『大正新脩大藏經』 Z = 『昭和新聞大日本統藏經』
 伊藤隆壽
 [1974] 『三論教学における初章中仮義(上)』(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三十二号、一九七四年三月) pp.263-280.
 加藤精一
 [2001] 『空海と吉蔵—仏身観における類似と相違—』(『印度学仏教学研究』第四十九卷第二号、二〇〇一年三月) pp.92-99.
 菅野博士
 [1992] 『法華とは何か—法華遊意を読む—』(春秋社、一九九二年九月、東京)

- [1988] 『法華統略』上巻（法華経注釈書集成六、大蔵出版、一九九八年三月、東京）
- [2000] 『法華統略』下巻（法華経注釈書集成七、大蔵出版、二〇〇〇年三月、東京）
- 木村宣彰
- [1988] 「五種法身説—中国仏教初期における法身説の一類型—」（『仏教学ゼミナー』第四十八号、一九八八年十月） pp.11-28.
- 末光愛正
- [1986] 「吉蔵の仏身論」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第四十四号、一九八六年三月） pp.360-375.
- 長尾雅人
- [1982] 『撰大乘論 和訳と注解』上巻（インド古典叢書、講談社、一九八二年六月、東京）
- [1987] 『撰大乘論 和訳と注解』下巻（インド古典叢書、講談社、一九八七年四月、東京）
- 花野充道
- [2000] 「智顛と吉蔵の法華仏身論の対比」（『天台学報』第四十二号、二〇〇〇年十一月） pp.108-114.
- 平井俊榮
- [1975] 「実相と正法—吉蔵における法の観念と体系—」（『平川彰博士還暦記念論集 仏教における法の研究』春秋社、一九七五年十月、東京） pp.333-354.
- [1976] 『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』（春秋社、一九七六年三月、東京）
- [1978] 「吉蔵の仏身論—三身説を中心に—」（『仏教学』第六号、一九七八年十月） pp.1-24.
- [1995] 「東アジア仏教の仏陀観」（『シリーズ・東アジア仏教』第一巻「東アジア仏教とは何か」、春秋社、一九九五年四月、東京） pp.69-96.
- 藤本 晃
- [1988] 「中国仏教に於ける仏身論の変遷」（『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』第九集、一九八八年三月） pp.84-88.

丸山孝雄

- [1977] 「吉蔵の仏身観—法華遊意を中心として—」（『大崎学報』第一三〇号、一九七七年十二月） pp.23-52.
- [1978] 「吉蔵の法華遊意における仏身観」（『印度学仏教学研究』第二十六卷第二号、一九七八年三月） pp.76-83.